

天武、持統兩朝から大宝年代の政治過程まで述べるべきであるが、北山氏はそれを六年前の「万葉の時代」にゆずっている。成書としての「大化改新」はこの両書を書きでである。そして、北山氏の古代人民への愛情はなみなみならぬものがある。書紀や万葉集のなかにでてくる歌にひかえ目にうたわれている天下の公民の嘆きは、本書のいたるところで、ウィウィツドな歴史的事実として再現され、「民衆のための歴史学」を主張する北山氏の学問的立場を見事にあらわしている。

このことと関連して、本書のねらいは、記紀・万葉の創造的精神の解明という問題にある。戦後、歴史学と文学が協調し、提携して、いわば共同研究という形で、これまでにみられなかった学問上の成果をあげてきたが、万葉の歌が生みだされた時代と人間の史学的分析という点において、北山氏はすぐれている。アカデミックな万葉学が、書誌学や解釈学の領域で、一〇〇〇年の研究歴を誇るとしても、文学としての万葉研究という批判的研究の立場からすれば、それはまだ本格的な文学研究になりえない

いともいえよう。万葉の歌を訓み解くことは、必ずしも万葉の歌を文学として把握したことにほならない。万葉読みの万葉知らずということも不思議ではない。今日の万葉学は、古事記学もそうであるが、解釈学的研究生態から批判的研究態勢へと止揚されねばならない。はてしない訓話註釈や煩瑣極まる考証学からある程度解放して真に文学としての古事記や万葉集の研究体制を批判的研究として確立すべきであろう。古代文学ほど時代と人間に規制されるものはないのであるから、こうした意味で、北山氏のような歴史学者が、古代文学の領域にはいつてきて盛んに発言することは、よるこばしい現象なのである。書誌学や解釈学の領域外における国文学者の時代と人間把握の甘さや見当はずれは、一般に免れないところではあるが、本書は、いわゆる国文学的万葉研究、記紀研究にかけている栄養を補う上に、大きな役割をはたすであろう

(二三八ページ、岩波書店)

### 文学部講師

西郷信綱著

## 詩の発生

古庄ゆき子

著者は、戦後いち早く「古事記」「日本古代文学」「貴族文学としての万葉集」等の名著を世に出すことによって、国文学を歴史としてでなく、又文献としてでもなくまさしく文学として把える方法を、又、国文学者の主体改造を国文学者に迫った人である。この著者がその時期から一貫して追求して止まないのは古代王権の問題である。「詩の発生」もこの問題を中心とした近年の論文八篇を集めた論文集である。

古代王権―「それが日本の詩的精力の『盗人』だった」と言われる著者は、もっとも激しく日本という国の土壌の暗さを知っている人である。一部の近代主義者のように過去が簡単にほうむられないものであり捨てたり出来ないもの―今少し怖しいもの―であることを知っている人である。こうした著者はわれわれの祖先が豊かな

ギリシヤ神話を生み得なかつた秘密を、古代に劇を生み得なかつたという事の政治的な又人間的な意味を古代王権を軸にして把えていく。

われわれの周囲（わたしを含めて）には古事記を歴史書として、又はそれに近いものとして拝きするといった、又それゆえ逆に否定しようとするといった、柿本人麿を宮廷詩人であるために拝きし、それゆえに否定しようとするといった俗論が満ち満ちている。そうしたいづれにも対象を文学の問題として把える学問的力が欠けていると思う。私などがかさにかかっていえるわけではないのだけれども、この本をよんでみると全くその感を深くする。

著者が古代における詩と散文の問題、神話の問題、ジャンルの問題等々、その豊富な文学の武器で古代王権の問題、古代における人間の問題をあげき出していく時、読者である私は一種高い緊張関係をその著者と結んでいるのに気付く。それは読者である私の変革をも要求せずにはおかぬものである。少くとも自分の貧弱な手持ちの知識に居すわったまま読むことの出来ない本で

ある。

（未來社刊 A五判三二五頁四八〇円）

文学部講師

### 告知板

ごあんない

〃散策の会〃

皆さん、そこをむやみやたらにでもいから歩きまわってごらん下さい。

春には春、夏には夏、秋には秋の、数かぎりない花々が咲いては散り、散っては咲いているのに気づくでしょう。ところであの花は、この草は何という名前だろう？。

その時、一瞬間だけはそんな興味を持ってみますが、いつもそれを正しく知り得ないままに終るということが多いのではないでしょう。そうです。私達の生活があまりにも近代化（う）されていく中では、名もないものは美しいものとしての生命をうばわれて行くからです。しかし、いつの時にも美しいものは美しいものでなければならぬはずですし、いつの時にも私達は美しいものを美しいと感じなければならぬはず

です。そこで次のようなことを試みたのですがいかがでしょうか。

まず身近にある有名無名の植物の中で、古くから歌や詩や俳句に詠まれたものを、それらの作品と同時にまとめて見直してみよう。そうしてささやかなものにも生命がある。美しさがあることをもう一度確かめようというようなサークルを作ってはどうかと思うんです。そして草花や自然物にきわめて造詣の深い川島教授の御指導をいただいて、単に興味本位でなく体系的にそれらをまとめて行くことは意義のあることだと思ふんですが……。

具体的なプランは目下研究室で考慮中ですから、お問合せは推葉にして下さい。

〃散策の会〃